

臨地実習における看護学生の

「他職種との連携」に関する学習の実態（第1報）

長澤利枝 伊東志乃 前野真由美 良知雅美 牧野典子

The student's Learning about Cooperation of the Nurse
and Other Profession in Clinical nursing Practice

(the first Report)

Rie NAGASAWA

Sino ITO

Mayumi MAENO

Masami RACHI

Tsuneko MAKINO

・研究目的

近年、医療の高度化や在院日数の短縮化に伴い、患者及び家族の抱える問題の解決のために、看護職と他職種との連携は欠くことのできないものとなってきている。そのような状況を背景として、看護学生の臨地実習においても「他職種との連携」の重要性を学ぶことが求められている。

しかし、実際に看護学生が臨地実習を通じて、それを具体的にどのような場面を通じて学びとっているのかについては、実態が十分に明らかにされていないのではないかと考える。

そこで、本研究は、看護学生の「他職種との連携に対する意識」及び「他職種との連携の重要性を学んだ実習経験」を明らかにすることを通じて、「他職種との連携」を臨地実習を通じて学習していくための、効果的方法を検討する一資料とすることを目的とする。

・研究方法

1．研究対象

本学第一看護学科3年生のうち調査に同意が得られた、臨地実習における6グループ計34名の学生。

2．調査期間

平成13年5月～11月

3. 調査方法

以下の3回に分けて、同内容の質問紙調査を実施した。

- 1) 3年生における初めての臨地実習である、「成人看護実習」が始まる前のオリエンテーション時
- 2) 上記「成人看護実習」が終了する週(第3週目)の帰校日
- 3) 「精神看護実習」が終了する週(第2週目)の帰校日

4. 調査内容

質問紙において以下の項目を調査した。

-)看護職と他職種との連携の必要性について
 - 必要性の有無
 - の理由
-)看護職と他職種との連携の必要性を感じた経験・場面について
 - 連携の必要性を感じた実習の種類
 - 連携の必要性を感じた他職種の種類
 - 経験・場面の具体的状況(自由記述)

5. 分析方法

- 1) 調査内容) ・ 及び)- ・ については、SPSS 統計ソフトを用いた単純集計及びクロス集計により分析した。
- 2) 調査内容) (自由記述)については、文脈の中で捉えた特性を抽出しそれらを比較検討して、共通性・類似性を分析・整理している。(現在分析中)

. 結果及び考察

1. 看護職と他職種との連携の必要性について

- 1) 必要性の有無 表1参照
5つの選択項目「1. とても必要だと思う」「2. やや必要だと思う」「3. どちらともいえない」「4. あまり必要だと思わない」「5. 必要だと思わない」のうち、3回の調査共、「とても必要だと思う」または「やや必要だと思う」のどちらかを選択していた。これらの結果から、学生達のほとんどが看護職と他職種との連携の必要性を認めていることが窺われた。

表1 必要性の有無 (N=34)

	とても必要だと思う	やや必要だと思う	合計
1回目	34	0	34 (100%)
2回目	33	1	34 (100%)
3回目	32	1	33 (97.1%)

2) 必要性の理由 表2参照

3回の調査を全体的に捉えた場合、6つの選択項目のうち(複数回答)「選択項目3:患者・家族の抱えている問題は多種多様であるため、その解決のためには色々な職種の人達が協力し合わなくてはならないと思うから。」を選択した学生が最も多く、以下「選択項目5:実習を通じて、看護職と他職種の連携(協力)の必要性を実感したから。」「選択項目4:授業や教科書の中で、チーム医療が大切だと言われていたから。」の順になっていた。ここにおいて、連携の必要性について肯定的に捉えた項目(選択項目3・4・5)を選択した学生が、選択数の順位第1位~3位を占め、逆に連携の必要性をやや否定的に捉えた項目(選択項目1・2)を選択した学生は、選択数の順位第4位~5位であった。これらのことから、学生達の間これまで経験した授業や実習等を通じて、他職種との連携の必要性に対する肯定的意識が、ある程度定着していることが窺われた。

< 選択項目の内容 >

選択項目1:患者・家族の抱えている問題は、すべて看護職だけで解決できると思うから
 選択項目2:他職種と連携(協力)しなくてはならない問題や状況が、思いつかないから
 選択項目3:患者・家族の抱えている問題は多種多様であるため、その解決のためには色々な職種の人達が協力し合わなくてはならないと思うから
 選択項目4:授業や教科書の中で、チーム医療が大切だと言われていたから
 選択項目5:実習を通じて、看護職と他職種の連携(協力)の必要性を実感したから
 選択項目6:その他

表2 必要性の理由:順位 複数回答,()内は選択者数

順位	1回目	2回目	3回目
1位	選択項目3(34)	選択項目3(34)	選択項目3・5(31)
2位	選択項目5(18)	選択項目5(32)	
3位	選択項目4(17)	選択項目1・4(5)	選択項目4(6)
4位	選択項目1(8)		選択項目1・2(2)
5位	選択項目2(6)	選択項目2・6(1)	
6位	選択項目6(1)		選択項目6(0)

2. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた経験・場面について

1) 連携の必要性を感じた実習の種類 表3参照

3回の調査を全体的に捉えた場合、7つの選択項目「基礎看護実習」「成人看護実習」「成人看護実習」「小児看護実習」「母性看護実習」「老人・地域看護実習」「精神看護実習」のうち、学生が選択した項目は「基礎看護実習」「成人看護実習」「成人看護実習」「精神看護実習」の4つに限定されていた。これらの結果は、1・2回目の調査が、学生達が3年生になって初めて行う「成人看護実習」の実習直前及び実習3週目(全3週間)に実施され、それ以前に経験していた実習は「基礎看護実習」(2年次に経験している)のみであったことに関連していると考えられる。また、3回目の調査は、学生達の臨地実習後半(9月~11月)にある「精神看護実習」の実習2週目(全2週間)に実施され、ほぼ全学生が臨地実習の全部を終了していなかったことに関連しているとも考えられる。全体的に多くの学生達が、調査した時点から最も近い時期に経験した実習を選択していた。

表3 連携の必要性を感じた実習の種類

実習の種類	1回目(N=32)	2回目(N=32)	3回目(N=28)	合計
基礎看護実習	32	0	0	32
成人看護実習	0	32	1	33
成人看護実習	0	0	1	1
小児看護実習	0	0	0	0
母性看護実習	0	0	0	0
老人・地域看護実習	0	0	0	0
精神看護実習	0	0	26	26
合計	32(100%)	32(100%)	28(100%)	92

2) 連携の必要性を感じた他職種の種類 表4参照

3回の調査を全体的に捉えた場合、「医師」「医療ソーシャルワーカー(MSW)」「薬剤師」「栄養士」「理学療法士(PT)」「作業療法士(OT)」「言語療法士(ST)」「放射線技師」「事務職員」「その他」の10職種の選択項目のうち(複数回答)最も多かったのは「医師」65名(20.6%)であり、以下「PT」及び「OT」が同数で42名(13.3%)、「栄養士」40名(12.7%)、「薬剤師」39名(12.4%)、「MSW」33名(10.5%)、「放射線技師」16名(5.1%)、「その他」15名(4.8%)、「事務職員」13名(4.1%)、「ST」10名(3.2%)の順になっていた。第1位の「医師」については、学生達が実習を通じて最も接触する機会が多い他職種であることや、ナースステーション等にて看護職との関わりが多く見られる他職種であることがその要因となっていることが考えられる。第2位に「PT」「OT」がなった要因として、1つには、1・2回目の調査時点で、ほとんどの学生達が実習を経験していた「基礎看護実習」や「成人看護実習」において、多くの学生が担当患者のリハビリテーション場面に接したことが考えられる。また、もう1つには、3回目の調査時点で、ほとんどの学生達が実習を経験していた「精神看護実習」の中で、全員の学生が「OT」から精神科リハビリテーションの講義を受ける機会を得ていたことが考えられる。第3位に「栄養士」がなった要因としては、2・3回目の調査時点でほとんどの学生達が実習を経験していた「成人看護実習」において、全員の学生が「栄養士」による栄養指導の見学を行っていたことが考えられる。逆に、第6位「放射線技師」及び第9位「言語療法士」については、実習を通じて、学生達がこれら職種と直接接する機会や、看護職とこれら職種との関わり場面に接する機会がかなり少なかったために、選択数が少なかったのではないかと考える。

表4 連携の必要性を感じた他職種の種類 複数回答

職種	1回目	2回目	3回目	合計
医師	18	25	22	65
PT	21	12	9	42
OT	11	5	26	42
栄養士	16	18	6	40
薬剤師	11	21	7	39
MSW	7	12	14	33
放射線技師	6	9	1	16
その他	2	5	8	15
事務職員	2	5	6	13
ST	6	3	1	10

2) 経験・場面の具体的状況
現在、整理・分析中。

・まとめ

今回の研究において、看護学生達が、それぞれに経験した臨地実習での経験や授業を通じて、看護職と他職種との連携の必要性に対する肯定的意識を有していることが、ある程度明らかになったと考える。実際に臨地実習のどのような場面を通じてその必要性を実感したかについては、現在分析中のため明らかになっていないが、学生達が経験する実習内容（他職種からの講義や業務見学等のプログラムが設定されているかどうか等）が大きく影響していることも考えられるため、今後も引き続き分析・検討していきたい。

なお、今回の研究の最終的な結果については、平成 14 年度静岡県立大学短期大学部研究紀要にて報告する予定である。

(2003 年 3 月 19 日 受理)